



around the world

英国CPTPP加盟の戦略的意義

米ウィルソンセンター
アジアプログラム副ディレクター 後藤志保子

世界史上、これまでで最も野心的な自由貿易協定であるCPTPPに加盟することは、イギリスにとって政治的な勝利と評価されるはずであった。少なくとも半年前に就任したばかりのリス・スナク首相にとって、あるいはCPTPPこそブレグジット後もがき続けてきたイギリスにとっても、新たな方向性を示す経済戦略の一環となることを期待していたのは確かである。

しかし、まずはヨーロッパとの貿易関係の強化を求めるイギリス国内の世論は冷やかで、アジアを中心とするCPTPPでは英国経済を活性化するには不十分であるとして、今年四月の段階で、すでにそれほど注目されなくなっていた。

実際、ブレグジット後の英国が直面する経済的現実は一層厳しく、アジアに目を向ける前に、まずはEUとの通商関係の再構築を優先する声が圧倒的に多

数なのは当然である。四月に発表された国際通貨基金(IMF)の『世界経済見通し』によると、今年度のイギリスの成長率はマイナス0.3%とG7諸国の中で最も低い。その上CPTPP参加国のGDPが世界の15%を占めていながら、イギリスの経済成長にはわずか0.1%しか貢献しないと予測されている。つまり、EU加盟国として享受していた、非関税で効率的な市場アクセスの喪失を補うには、CPTPPでは明らかに不十分である。

しかし、経済的効果は期待できないものの、外交面ではCPTPPの新規加盟国としてイギリスは国力を発揮する新たな場を確立したといえる。

まず初のヨーロッパ加盟国として、インド太平洋地域秩序を構築する上で自国だけでなくヨーロッパの声を実質的に反映する役割を担うことになる。また、これまでオーストラリア・アメ

今年三月、包括的・先進的TPP協定(CPTPP)に参加する一カ国は、イギリスの加盟を承認した。

リカと共に築いたAUKUS協定をはじめ、主に安全保障を重視した地域戦略が先行してきたが、そこに経済的枠組みであるCPTPPを組み込むことで、より重層的なインド太平洋秩序を
実現できる。そのことは、イギリスが
インド太平洋戦略のみならず、自由で
開かれた国際秩序を推進する国として
地位を確立する、換言すれば、グロー
バル・ブリテンのビジョンを実現する
ための第一歩となる。

一方、これから中国と台湾の加入申
請を迫られるCPTPPの加盟国に
とつても、イギリスに対する期待は大
きい。

そもそも中国と加入交渉を開始すべ
きか。また台湾の加入を支援すべきか。
中国に先立って台湾を加盟国として迎
えることはできるのか。つまり、CPT
PPは通商協定であると同時に、「一
つの中国」の理念に、どこまで中立的

に対処できるかという、インド太平洋
地域の秩序保持を議論する場ともなり
つつある。さらに、今後米国が加入す
る可能性は極めて低いだけに、中台の
加盟問題をCPTPPという場で議論



今年4月、ロンドンで経済成長をテーマに演説するスナク首相（代表撮影／ロイター／アフロ）

するには、日本、イギリス、オースト
リア、ニュージーランドおよびカナダ
の連携が不可欠となる。

特に日本とイギリスの場合、自由で
開かれたインド太平洋に対するコミッ
トメントを共有するのみならず、二国
間でも、経済面では二〇二一年に包括
的経済連携協定（日英EPA）が発効
し、安全保障面では今年一月に岸田首
相がイギリスを訪問して円滑化協定が
署名された。長期に及ぶ信頼関係が、
広範囲にわたってさらに強化されるこ
とが期待される。

CPTPPは単なる通商協定枠を超
えて、難しい経済状況に直面する英国
が大国として活躍できる場でもある。
インド太平洋地域が直面する秩序を維
持するにあたって国家間の信頼関係が
問われるなか、CPTPPという枠組
みを通じた日英の協力関係がさらに強
化されることが期待される。●